

2016 年度

## 全日本少年サッカー大会 12 ブロック代表決定大会準決勝レポート

表記大会の準決勝が、快晴の空の下 10 月 23 日(日)に八王子市小比企町の文化大グラウンドで行われた。中央大会への切符を獲得した 4 チームの試合だったので、両試合とも見ごたえのある接戦であった。「ARTE 八王子 FC Jr vs FC 杉野」と「みなみ野 SC vs C B X SC」の 2 試合の準決勝をレポートする。

ARTE 八王子 FC Jr 1  $\left[ \begin{array}{c} 0-0 \\ 1-1 \end{array} \right]$  1 FC 杉野

PK 戦 8-7 で ARTE が決勝進出

ARTE、杉野共に 3-2-2 のフォーメーションで DF ラインの両サイドが積極的に攻撃参加をする布陣であった。立ち上がりは両チーム共寄せが早く、なかなかシュートまで持ち込むことができなかった。やっと 4 分に ARTE 右 DF の 5 番が中盤の相手陣地に入った所で横パスを受け、ラン・ウィズ・ザ・ボールでゴールに迫り、最初のシュートを放った。さらに 6 分には ARTE 2 列目の 8 番が相手陣地でボールを受け、マルセイユ・ルーレットでボールを保持し、右を駆け上がった同じく 2 列目の ARTE 2 番に繋いで杉野ゴールに迫った。7 分、ARTE の右コーナーキックで 5 番がライナー性の鋭いボール蹴り、かろうじて杉野 DF がクリアしたが、あわやオウンゴールとなるかと思われた。このように ARTE がやや押し気味に試合を進めたが、ARTE の DF ラインの 3 人(右から 5 番、7 番、11 番)は、杉野の攻撃を簡単にクリアしてしまうことが多く、8 分、味方陣地中央から 5 番が大きく蹴り返した際には、ARTE ベンチからも「アーッ」という失望の声が漏れてしまっていた。その後も ARTE ベンチからは「慌てな〜い、慌てな〜い」という指示が何度か出されていたが、中々改善されなかった。一方、杉野の DF ラインの 3 人(右から 11 番、18 番、15 番)は、相手から奪ったボールを中盤や前線の味方に丁寧に繋ぐことが多く、日頃からボールを大切にしろという指導が徹底していることがうかがえた。特に中央の杉野 18 番は体格が良く、ARTE のロングボールをよく跳ね返していたが、ただクリアするだけではなく、味方の名前を呼んでパスを繋いだり、味方に対してプレーに関する指示の声を出す等、リーダーシップがあった。次のカテゴリーでもさらに戦術的理解を高め、技術も磨いて大きく成長して欲しい選手であった。11 分、ARTE 陣地の左奥(杉野の攻撃方向からは右奥)へ流し込まれたボールを杉野 FW19 番がよく走って追いつき、ゴール前にクロスをあげた。そのクロスにもう一人の杉野 FW45 番がヘディングで合わせたが、惜しくも枠を捉えることができなかった。14 分には杉野 11 番が、ARTE のパスを素早い寄せでインターセプトをし、そのまま一気にドリブルで ARTE 陣地に切り込んで行った。残念ながらシュートには結びつかなかったが、守備

の優先順位をよく理解した素晴らしいプレーであった。16分には中盤でパスを受けた ARTE の FW13 番が、綺麗なハーフターンで前を向き、杉野陣地に上がっていった。この 13 番は体格や走るスピードの面では、この年代で秀でているわけではなかったが、プレースピードの面では何度も素早いハーフターンをする等、抜群のキレを示していた。顔も上がり視野も確保できているようで、素早い判断で杉野陣地のわずかなギャップを見つけては、果敢にドリブル突破も試みていた。ジュニア年代ではどうしても成長速度に個人差が有り、早熟な子どもの方が走るスピードやキック力、高さの面で目立ってしまうのであるが、指導者の皆さんには、早熟な子どものパワーとスピードの頼るようなチーム作りをするのではなく、この 13 番のように個々の選手のプレーと判断のスピードを高めることを目指した指導をしていただきたい。13 番が今後もトレーニング・食事・休養のバランスを崩さない生活を続け、ユース年代で素晴らしい選手へと成長していってくれることを期待する。

この時間帯での両ベンチからの声で、非常に良いものがあつたので紹介したい。杉野ベンチからは「グラウンドは悪いけれど、ダイレクトとかもっと使っていていいぞ〜 ミスを怖がらない！」ARTE ベンチからは「慌てな〜い、慌てな〜い。ここで集中！ワンタッチ目、ワンタッチ目！」ARTE の選手達には、ノージャッジで相手陣地へ大きく蹴り込むようなプレーが時々出てしまっていたが、杉野の選手達は、縦方向のパスコースが無いと判断した時には横へ繋ぎ、ボールを大切にする姿勢が徹底されていた。後半の杉野ベンチからの声には「サイドステップを踏んで、パスを受ける体勢を作って！」というものもあつた。単にパスを出す技術を磨く練習だけではなく、パスの受け方も意識させた練習を積み重ねているのであろう。多くのチームに是非、参考にして欲しい。

17分、ARTE ゴール前で杉野 19 番が、軽快なステップで ARTE の DF を右にかわした。ARTE の GK 1 番は、勇気を持って飛び込んでいったが、19 番はそれも右のアウトサイドタッチでかわしてゴールにシュートを突き刺した。このまま杉野 1 点リードで前半を終えた。

ハーフタイム、杉野ベンチは選手をベンチ前に半円状に座らせ、ベンチに座ったコーチが身を乗り出して丁寧に試合の分析をし、選手に諭していた。ARTE ベンチは選手をベンチ後方へ移動させ、円形に座らせた中にコーチもしゃがんで作戦版を使い優しく語りかけていた。選手からは笑いも漏れており、和やかな雰囲気の中で慌てない、焦らないことを強調していた。両ベンチとも選手とコーチの間で信頼関係がしっかりと構築されていることがうかがえた。

後半、ARTE は FW の 9 番に代えて 6 番を 2 列目に入れ、前半 11 分に 2 番と交代していた 4 番を FW にあげた。この 4 番は小柄ではあるが、細かくステップを踏み、プレースピードのある将来性を感じさせるプレーヤーであった。一方杉野は長身でスピードのある 53 番を FW に入れ、前半 FW で先制点を決めた 19 番を左サイド DF に移動させた。1分、ARTE13 番がペナルティエリアに切り込みシュートを放ったが、杉野 GK 1 番が判断良く飛び出して弾

いた。2分、ARTEのコーナーキックを後半から入った6番がヘディングでゴール左隅に決め同点に追いついた。ARTEベンチの交代の判断がピタリと当たった場面であった。この時、追いつかれた杉野ベンチからは「バランス～、バランス～」という注意が伝えられただけで、選手をなじるような怒りの声は一切発せられなかった。筆者は30年近くユース年代を指導してきたが、指導者資格を取るまでの若い頃は、自分自身が試合にのめり込みすぎて、失点した際に「何やってんだ！マークをちゃんと捕まえておけよ！」と選手を叱りつけた記憶がある。今思い出しても当時の選手たちに申し訳ないことをしたと後悔している。前半に失点したARTEベンチからも、選手を怒鳴りつけるような声はなく、ジュニア年代を指導する大人として、両ベンチとも素晴らしい対応であった。この点も多くの指導者に参考にしていただきたい。

4分、ARTE5番が中盤からロングシュートを放ったが、杉野GK1番の正面であった。常に相手ゴールを意識し、シュートを狙うことは悪いことではない。世界のサッカーやJリーグでも、相手GKが前に出ている場面で、ハーフウェイライン前後からロングシュートを決めたプレーはある。しかし、この時の杉野GKのポジションは前に出すぎていたわけではない。ややグラウンドが狭く、ロングシュートも狙っても良いとコーチから指示が出されていたのかもしれないが、相手に簡単にボールをプレゼントしてしまうもったいないプレーであった。決勝後に12ブロックの技術委員長からもコメントされたようであったが、ARTEの選手達にはもっと状況をよく観て（観るべきものは「ボール」「相手」「味方」「ゴール」そして「スペース」である）簡単に縦に蹴ってしまうのではなく、的確な判断ができるように成長して欲しい。

12分、ARTE13番が中盤からドリブルで仕掛け、そのままシュートを放ったが惜しくもゴール左に外れた。たびたび登場する13番は、確かにドリブル突破力の高い選手ではあるが、この時の杉野の選手たちはズルズルと後退してしまい、結果的にシュートまで打たれてしまった。おそらく前半の内に杉野の選手たちは、ARTE13番に自由にボールを持たせたら危ないと気付いたと思う。こうした相手の選手に対しては、より守備の優先順位を意識した対応をして欲しかった。ここで改めて個人戦術レベルでの守備の優先順位を以下に整理しておく。

**【個人戦術レベルでの守備の優先順位（守備の場面で狙うべきプレーの順序）】**

- 1 相手にボールが渡る前にカットする（インターセプト）  
※このプレーは、相手チームがボール保持している時にマークする相手選手との距離を詰めておかななくてはならない。しかし単純に近づいてしまうと裏を取られることもあるので注意が必要である。
- 2 1ができなければ・・・相手のファーストタッチのミスを狙ってボールを奪う
- 3 1も2もできなければ・・・ボールを保持した相手を振り向かせない
- 4 1も2も3もできなければ・・・振り向かれてしまった相手にスピードに乗ったドリブルをさせず、できるだけ味方ゴールから遠ざける（ジョッキー）

身体のサイズが大人に近づき成長が止まり始めるユース年代で、高いレベルに到達する

ためには、個人戦術を理解したプレーをジュニア年代のうちに身に付けておく必要がある。指導者の皆さんはもちろん、選手の皆さんにも是非とも攻守の個人戦術を意識した練習と試合を積み重ねていただきたい。

13分、ARTE13番がARTE5番からのくさびパスを受け、身体を回転させながら杉野DFと入れ替わりペナルティエリア内へと進んでいった。ARTEは前半6分での8番のプレーやこの13番のプレーのように、前線から中盤の選手が多彩なプレーで相手をおかわして前を向いていた。ARTEが工夫をした練習を組み立てていることがうかがえた。最近では各チームとも低学年から、足の裏も含めて両足を使わせるドリブル練習を取り入れていると思うが、その中に相手を背負っていない状態でのハーフターン、相手を背負った状態でのスクリーンプレー等、状況に応じた前を向くためのプレーも取り入れていただきたい。世界の中で日本人が身に付けるべきプレーは、こうした流れの中でのスピーディで器用なプレーではないだろうか。ユース年代以降には、スピードとパワー、スタミナも当然重要となっていくが、そこに日本人らしさを付け加えていかななくては、世界のトップに並ぶことはできないであろう。そしてこのスピーディで器用なプレーを身に付ける上で最適な年代は、ジュニア年代なのである。指導者の皆さんには、その重要な年代を担当しているという意識を強く持って、いろいろなボールコントロール技術を練習に取り入れていただきたい。

14分、杉野右DF11番がオーバーラップを仕掛け、ARTEの左サイドを崩そうとしたが、ARTE左DF11番(?)が粘り強く対応して体を寄せ、クロスを上げさせなかった。それで得た杉野のコーナーキックであったが、ARTEが一気に逆襲を仕掛けた。15分、跳ね返したボールを左DF11番が持って鋭いドリブルでハーフウェイラインを超え、前方に流れてきた4番に繋いだ。4番は左サイドで杉野DFを引きずりながらも突破し、ゴール前に低いクロスを蹴り込んだ。誰かが触れば1点という場面だったが、誰も触ることができず惜しくもゴール前を横切って行ってしまった。16分、ARTE4番が後方からの頭超えのボールに対してペナルティエリア内へ飛び込み、ヘッドでコースを変えようとしたが、杉野GK1番が判断良く飛び出してそのボールをカットした。杉野1番は判断がよく勇気もあり、身体的にも手足が長く将来性を感じさせるGKであった。今後も足元のボールコントロール技術やスローイングによるパスの技術も磨き、素晴らしいGKに成長して欲しい。終了間際、杉野陣地でARTEが直接フリーキックを獲得し、キック力のある5番がゴールを狙ったが、惜しくも右に外れ、1-1のまま試合が終了した。決勝進出チームを決めるためのPK合戦では、両チームとも7人目まで決め続けるという大接戦であったが、ARTEが最後にGKを身体能力の高い5番に交代させるという奇策に出て、杉野の8人目を止めて決勝進出を決めた。

両チームともさすがにここまで勝ち上がってきただけあり、ベンチワークも含め素晴らしい点が多いチームであったが、それぞれに課題も見られた。中央大会では12ブロックを代表するチームとして、少しでも課題を克服し、勝ち上がってくれることを期待している。

みなみ野 SC 2  $\left\{ \begin{array}{l} 0-0 \\ 2-1 \end{array} \right\}$  1 八王子CBX FC

この試合の両チームは共に3-3-1のフォーメーションであった。立ち上がりの40秒、スローイングをみなみ野ワントップの9番が受け、ドリブルでCBXゴールに突進した。そのままループシュートを放ったが、惜しくもゴール上に外れた。この9番は細かいステップで突進力があり、たびたびCBXゴールに迫っていった。また中盤右の22番もスピードがあり、個人での突破を何度も試みていた。彼らには今後もさらに突進力を磨いて、特徴を持った選手として大きく成長して欲しい。4分、CBX中盤の9番が前線でボールを受け素早く前を向いて、右から上がってきた長身の2番に丁寧に繋いだ。この2番が中央ヘライナー性の速いクロスを上げた。みなみ野 GK1番が前へ出てこのボールをキャッチしようとしたが、こぼしてしまいヒヤリとさせられた。7分にはCBXワントップの15番に中盤右の19番と中盤中央の9番、さらに右DFの2番までもが加わって、素晴らしいコンビネーションで右サイドを突破していった。右からの鋭いクロス（シュートだったか？）をみなみ野DFが何とか跳ね返したが、CBX19番が拾い、再びシュートを放ったが決まらなかった。CBX2番は、常に前がかりで積極的に攻撃参加していた。その姿勢は素晴らしいが、早熟でこの年代では長身となっているため、スピードとパワーで相手を突破することができている。現状に満足することなく、左右両方の足（足の裏やアウトサイドも含めて）での細かいボールタッチ技術や戦術的判断のスピードを磨き、次のカテゴリーでも活躍できるように練習を積み重ねて欲しい。CBXはこの右サイドでのコンビネーションが素晴らしく、9分にも2番が自陣の右サイドでボールを持つと、中盤の19番が中央から右に流れていき、その先のスペースに2番が丁寧にボールを流し込んだ。ボールを受けた19番はみなみ野ゴールへ向き直り、DFをかわして中央にクロスを上げ、そこに2列目の9番が押し上げてきてシュートを放った。また14分には、CBXセンターDFの3番が誰もいない右奥のスペースに蹴り込んでしまった時に、ベンチから右DFの2番に対し「〇〇、開いてもらってあげようよ。いつもやっているだろう。」という声かけられ、2番がうなずいていた。普段からDFラインで丁寧に繋ぎ、中盤や前線とのコンビネーションで相手を崩そうとする練習を行っていることがうかがえた。一方みなみ野は、9番と22番、中盤左の7番を中心にたびたび個人での突破を試みていたが、CBXがその特徴をよく理解していたのか粘り強く対応し、完全に崩すことができなかった。しかしみなみ野のDFラインもCBXが2番を中心に押し上げてきた際のカバーリングがしっかりと出来ており、決定的な形は作らせなかった。このまま0-0で前半を終えた。

ハーフタイムでは両チームとも選手をベンチに座らせ、コーチがピッチ側に立って選手に語りかけていた。その際、個別に話をする時には腰をかがめ、視線を選手の顔の高さに合わせていた。第1試合の2チームも、選手の座らせ方こそ違ったが、コーチが選手と近

い高さの目線で指導を行っており、勝ち上がってきたこの4チームとも選手の人格を大切にして、コーチが頭ごなしの指導をしていないことがうかがえた。八王子市、12ブロックのすべてのチームに是非見習っていただきたい。ちなみにハーフタイムに何を話すか、指導者の皆さんはどのような工夫をされているであろうか？筆者のやり方を以下に示すので、参考にしていきたい。（これが正解というわけではないので、ご自身の方法を見つけていただくと幸いです。）

作戦版を手元に置き・・・以下をメモする。

- 1 相手チームのフォーメーションと背番号
- 2 注意すべき相手選手の特徴（例. 縦への突破力有り、中に切り込んでくる、レフティー、ミドルシュートを狙う、オーバーラップ有り、GKは前に出てくる etc.）
- 3 自チームの改善点（例. 寄せをもっと早く、○番に対してはカバーリングを忘れるな、ショートコーナーの際には2人行け、DFラインの裏へのボールはGKが出る etc.）
- 4 当日の天候（雨や風、太陽の向き etc.）が影響しそうな場合の注意
- 5 気持ちの面（リードをしている場合は「気を緩めるな」「0-0だと思って臨め」、リードされている場合は「焦るな」「諦めるな」「1点ずつ取り返そう」 etc.）

後半はみなみ野のキックオフで始まった。いきなり左サイドの7番にパスが繋がり、そのままシュートまで持ち込んだが、惜しくも外れてしまった。さらに2分、みなみ野右DF11番が右サイドをオーバーラップし、CBX選手との1対1を中にかわして中盤から押し上げてきた10番に横パスを繋いだ。10番はそこからミドルシュートを放ったがこちらも決まらなかった。このようにみなみ野が押し気味に試合を進めたのだが、3分、CBXがみなみ野陣地で直接フリーキックを獲得し、2番がロングキックで直接狙った。みなみ野GK1番は下がりながら何とか弾いたが、そこに詰めていたCBX9番が押し込んで先制した。みなみ野GK1番は、ハイボールに対して両足のつま先を前に向けたままステップして下がってしまったが、あの場面では下半身をひねって両足のつま先を斜め後方に向けて下がるべきであった。今後の課題として、是非改善する練習に取り組んでほしい。この場面でも、第1試合と同様に失点したみなみ野ベンチからは選手を罵倒するような声は一切出てこなかった。一方、CBXベンチからは「切るな～、気持ちを切るな～！」というアドバイスが出された。この両チームもさすがにここまで勝ち上がってきたチームだなと感心する、素晴らしいベンチワークであった。なかなか自分たちの特徴を生かせないみなみ野のベンチがここで動く。ワントップの9番を小柄な6番に交代させたのである。9番は何度もCBXゴールに迫っていたので意外に思ったが、この6番の投入が試合の流れを大きく変えた。6番は走るスピードの面で目立つ選手ではなかったが、前線でよく顔を出し、ボールを受けて押し上げてくる味方に丁寧に繋ぐことができる選手であった。このことで、前線の選手の個人技に頼っていたみなみ野の攻撃が、右DFの11番と左DFの99番の押し上げを有効に使う攻撃へと幅を広げていったのである。9分、みなみ野がアウトさせた9番を22番に変えて再び投入した。その直後、中盤で得たフリーキックをみなみ野10番が素早い

リスタートで、左前方の7番に繋ごうとした。残念ながら7番がそのボールに追いつけなかったため大きなチャンスとはならなかったが、この10番の判断は素晴らしいプレーであった。このチームの中では、ワントップと両サイドの選手が個人で仕掛けることが多かったので2列目の10番は目立たなかったが、6番の投入でそれまでボールをさばくことが多かった10番も、攻撃に顔を出す場面が増えてきた。10分、みなみ野左 DF99番が中盤からロングシュートを放ったが枠を捉えることができなかった。この99番はDFラインからよく押し上げてきていたが、1点をリードされたままで後半の半ばとなり、プレーに焦りがみられた。11分、CBX 9番がCBXゴールに向かおうとしたみなみ野10番を後方から引っ掛けてしまいイエローカードが出された。

ちなみにこの試合の主審は、良い角度と距離からプレーをジャッジし、「プレーオン」の声も良く通っており、緊迫したゲームを引き締めていた。第1試合では副審がオフサイドの旗をしばらく上げていたのを主審が見落とすという明らかなミスがあったが、12ブロックの審判団は、試合ごとにお互いのジャッジについて本部後方で話し合い、判定の精度を上げようと努力されていた。この場を借りて技術委員会からも感謝したい。

12分、みなみ野ベンチは焦りの見えていた99番を3番に交代させ、フォーメーションを2-3-2に変更して得点を狙う姿勢をより明確にした。13分、CBX 9番が中盤をドリブルで上がり、右前を走る10番にスルーパスを出した。パスを受けた10番がシュートを放ったがみなみ野 GK1番がはじいた。これで得たコーナーキックをCBX 2番がヘディングシュートでゴールを狙ったが、惜しくも枠を捉えることができなかった。14分、再投入されたみなみ野9番が中に切れ込み、逆サイドの7番に繋いだ。7番は左サイドから低くて速いシュートを放ち、CBXゴールの右サイドネットに突き刺して同点に追いついた。この時点でCBXベンチからは「大丈夫、大丈夫。追いつかれると思っていたから」という声が発せられ選手の動揺を鎮めようとしたが、みなみ野の勢いを止めることはできなかった。15分、中央でボールを受けたみなみ野6番が右から押し上げてきた11番へ丁寧に繋いだ。11番はCBXゴールに突進し、対峙したCBXのDFを一旦内側にかわした後に外側に切り返し、右足で強烈なシュートをゴール右上に突き刺した。みなみ野がわずかの時間で一気に試合をひっくり返したのである。リードしていたチームが、同点に追いつかれると一気に逆転されるというのは、サッカーではたびたびに見られるシーンである。指導者の皆さんは、選手に対してこうした現象を日頃から何度も話しておくといいであろう。プレーをするのは選手達なので、いかに追いつかれた時に相手の流れを断ち切って試合を落ち着かせるか、選手の皆さんも考えておくことが大切である。

追いついた後、みなみ野ベンチは同点シュートを放った7番を99番に交代させた。一旦出したDFの99番を再度投入することでディフェンスを強化して逃げ切ろうとしたのかもしれない。しかし17分、CBX左FW10番が左サイドを突破し、みなみ野ゴールに迫った。CBXセンターFW15番がゴール前でバウンドしたボールをヘディングで狙ったが、シュートが弱く決まらなかった。CBX10番は柔らかいドリブルから仕掛けることができ、これ

からも自分の特徴を伸ばして行ってほしい選手であった。19分、みなみ野が相手陣地で直接フリーキックを得た。11番が走ってボールをまたぎ、その後方から10番が強烈なシュートを放ったが、惜しくもポストを直撃し追加点は奪えなかった。CBXも最後まで諦めずに反撃したが、みなみ野リードのまま試合が終了した。

この試合を総括すると、個の力が秀でた選手の多いみなみ野が、個人の突破力で局面を開きようとしたが、CBXがみなみ野の特徴をよく分析し、粘り強い守備でその良さを発揮させなかった試合ということができる。最終的には、前線でボールをさばくことのできる6番を投入してみなみ野が流れを変え、7番の素晴らしいミドルシュートと、11番の力強いドリブルからの強烈なシュートで逆転勝利をおさめた。個人の力で押し込むだけでなく、丁寧にボールを両サイドに散らすプレーもできるみなみ野も素晴らしいが、CBXの頑張りも賞賛に値する。両チームの中央大会での活躍に期待したい。

---

今年度のレポートも、昨年度と同じく2つの試合の流れをお伝えする中で技術委員会からのコメントを交えさせていただいた。今回は本部席側で観戦をさせていただいたため、4チームのベンチワークも見ることができた。年々ベンチや保護者席から大きな声で子ども達を叱責したり、具体的な指示（打て！出しておけ！持つな！etc.）をして、子ども達自身の判断の邪魔をするような場面は少なくなっている。また子ども達の心や身体を大切にする丁寧な指導も行われるようになってきた。そしてどのチームも子ども達自身がチームメイトに具体的な声を出して、プレーをより良く進めようとする場面が増えてきている。これは誠に喜ばしい流れである。

八王子サッカー協会技術委員会のスローガンは“八王子から世界へ羽ばたく子どもを育てよう”である。世界で活躍のできる創造的で逞しいプレーヤーを育てるためには、練習では質の高いトレーニングメニューを提供して、ジュニア年代で身に付けるべきボールコントロール技術と個人戦術を繰り返し教え、試合では大人からのサイドコーチングを極力少なくして、子ども達がコーチに頼らず自分で判断のできるプレーヤーへと成長できるよう、見守っていかなくてはならない。この流れが定着し、12ブロック各チームの子ども達のレベルがさらに高まっていくことを願っている。

※指導者の皆さんで、昨年度のレポート（2015年度全日本少年サッカー大会12ブロック代表決定大会レポート）、一昨年度のレポート（2014年度さわやか杯12ブロック決勝リーグレポート）をお読みでない方は、ぜひ目を通していただきたい。八王子サッカー協会HPの【委員会】から【技術委員会】をクリックして頂ければ、さかのぼって読んでいただくことが可能です。

※このレポートは試合を現地で観戦しながらメモを取り、記憶をたどりながら何日間かけてまとめたものです。ビデオで撮影して確認をしたわけではないので、背番号が間違っていたり、プレーの流れも正確ではないことがあると思われます。試合の正式な記録ではなく、あくまでも技術委員会からの見解を述べるためのレポートだということをご理解ください。